

2022年5月6日

飽きっぽさの素因

公益財団法人 国際通貨研究所
理事長 渡辺 博史

久しぶりにそれなりに人の動くGWとなったが、世の中では、コロナの第7波(?)、ロシアのウクライナ侵攻の激化など、心穏やかならぬ出来事が続いている。

そういう状況になると、多くの場合、これまで慣れ親しんだものに触れ続けていると何となく気持ちが落ち着くものだが、最近はこの「慣れ親しんだ」ものに依存することも難しくなっているようだ。

単なる歴史的偶然で生成した産物に過ぎないものを「万古不易」であるかの如くに扱い、無反省に墨守するものかどうかとは思いますが、最近では、ある一つのものを受容し続けられる心地よい期間が著しく短期化しているように思われる。

タレント（俳優、歌手、その他の能力のある者も含む）の興隆、凋落という変遷は新しい出来事ではなく、それこそ不変の事象かも知れない。ブームとなって一世を風靡して盛り上がったものの、何時しかほとんどの者が静かに退場していくのが常態である。しかし、最近では、その始点から終点までの期間が一層短くなっているように見えるが、それを加速しているのは需要する個人側の対応の変化である。自分がそのタレントの数少ない礼賛者であるときには全力を上げて支援するが、他の多くの人もそのタレントを讃え始める状況になると、身を引いていく人が増えてきた感じがする。そのタレントを自らが見出したと意識し、「生みの親」と呼ばれるようなポジションにあると思う限りは全身全霊でサポートするが、自らが支援者の単なる一員（one of the supporters）になったと認識した瞬間にその意欲、関心を失って背を向け、そしてまた新たな支援対象の探索に移行していくような感じである。したがって、今や時代を代表し得る希少な逸材というようなタレントなどというのは成り立たず、多くの少人数グループがそれぞれ支援するそこそこのレベルのタレントが多数並立することになる。まさに「自分だけのもの」なら執着するが他者と共には支援しないという意識が強くなっているのであろう。

と書いてきたが、ここでこういった文化時評をするつもりはなく、実はここで言いたいことは、政党に対する支持、支援が同様なサイクル・パターンに陥っている感じがするということである。所詮、世の中が多様化していく中で、極論すれば次元上の一本の座標の右左からの位置取り合戦である二大政党制が長続きする訳もなく、米国という

希少な例外事象を除けば、英国、ドイツ、フランスといった国々でも、各政党が三次元の X、Y、Z 軸交差する空間内のポジション取りから始まる領域拡大競争に移行し、ひいては更に複雑な X 多元空間での位置取りにおいて多数政党が競合する状況になっている。それだけ、独立して相互関連が薄く、かつ対立が明らかに生じる論点が増えてきているということだろう。

今回の大統領選に見られたように、フランスで古典的の二大政党である共和党、社会党が消滅寸前とも言えるまでに衰退している状況は極端な例としても、他の国でも旧来の二大政党以外の複数政党が増え、かつそれらが勢力を伸ばし、今や政権は連立形態でしか成立しなくなっている。米国でも、所得配分の均等化、社会民主主義の受け止め方、気候変動対応などを巡って民主党が分裂一歩手前まで行っているのみならず、共和党も一つであり続ける政党アイデンティティが前大統領との距離感意識の中で喪失されつつある。

多党分立となっても、各党が何をしたいかというビジョンを打ち出せばまだ救われるが、多くの場合、単なる既成政党へのアンチポジション取りの否定アピールしか行っていない。既存政党の政策の個別の論点への反対毎に一つずつの政党が成り立つというのであれば、無数の政党が発生してしまう。

その典型が、日本で進行しているのであり、伝統的某大政党への反対、旧権力の中核に居た某政治家への反発といったネガティブな構図でしか存在をアピールできない形をとって、新しい政党が雨後の筍のように多数生じて来た。かつ、既存勢力に反対ということを目指せばそれで良いのだという論理から、自らの党内での政策調整を怠った結果、外延が広がらず少数政党の域を脱せない。更に国民の重要関心事項ではないという誤った判断から外交政策の策定一本化を放棄した政党まで出て来る。これでは、国政を預かる政党にはなれないだけではなく、政党という名の組織に値しなくなって来ている。

有権者も、新しい政党が名乗りを上げると、しばらくの間はそれなりに支援を惜しまないが、それなりの基盤が出来、様々な考えを持つサポーターグループが集まって来た時点でタレント支援の場合と同じように関心、支持を失い始める。それに加えて、党構成員相互の論議による政策要綱の策定を怠けるのを見て、支援の意欲を一層失う。仮に怠けていないにしても、議論が集約に向かうことなく、多くの場合に分離、分党に向かうようでは、ある名前の政党への愛着もわからない。したがって、政党の賞味期限が極めて短くなっている。

「誰かさんとは違う」という過去、現在の姿勢を示すだけではなく、「どこかへ進んで行く」という未来への能動姿勢が魅力の源泉であることは、タレントも政党も変わりはないと感じる。このような問題意識をキチンととらえて、政策策定をしないと、未来へのビジョンなど作りえない。タレントと違って「貴方と共に考え、進んでいくのだ」ということを自ら訴えられる位置に居るはずの政党がその努力を放棄している。国民、有権者を飽きさせてはいけない、共に進むという協働の方向に向いてもらわねば将来は

ない、のだという自覚が乏しい。

政治家が、将来への大きなビジョンを打ち出さずに、現時点でのわずかな利益、小さな幸せのみをアピールしては、先行きは暗い。党内での議論の中で、最終的には自分が唱えている無茶な主張は通らないと認識しつつも人気取りのために暴論を吐き続ける政治家が出て来るのも、あの「世界」ではやむを得ないのかも知れないが、集約調整の議論をせずに各自勝手に唱えればよいという状態が続けば、そのような輩が増え、結局まともなビジョンを党としてまとめて打ち出せなくなる。

克服すべき楽しくないことへの苦渋の対処も含め、我々が現在、将来何をするのか、何処に行くのかというビジョンを打ち出せない政党への支援が続くなどということはある得ない。

国民が世の中の目まぐるしい変化についていけずに、また慣れ親しんだものに身を委ねようと思っても、その対象自身が分散を続け、かつ、それぞれがぶれ続ける状況では、国民の中にこう在りたいという視座を定めず新奇なものにすり寄ろうという傾向が出て来る。そして、新奇なものに接しても、それへの理解が及ばないとかそれでは得心出来ないということになるとそれが簡単にポイ捨ての対象になり、更に次のものに向かうという極めて飽きっぽい姿勢に傾斜していく。

しかし、そのような国民というか有権者の飽きっぽさを止めるというか、ただす努力をしていない政党の姿勢そのものが蔓延する飽きっぽさの素因なのだろう。

(IIMA メールマガジンへの寄稿)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2022 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: Nihon Life Nihonbashi Bldg., 8F 2-13-12, Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo 103-0027, Japan

Telephone: 81-3-3510-0882

〒103-0027 東京都中央区日本橋 2-13-12 日本生命日本橋ビル 8 階

電話 : 03-3510-0882 (代)

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>